

アデノウイルス感染症

Canine Adenovirus Infection

アデノウイルス感染症はジステンパーと並ぶ犬の代表的なウイルス性伝染病で、一型は犬伝染性肝炎ともよばれ、二型感染症は呼吸器感染症です。ほとんどの犬がこのウイルスに出会いますが、すべてが発症するというわけではなく、全く無症状のものから、劇症肝炎を起こして死にいたるケースもあります。この病気も世界各地で発生しています。初期の症状だけでは他の病気との鑑別が難しかったりして、現在でもワクチン未接種の仔犬や成犬、追加接種を受けていない犬の死亡率が高い恐ろしい病気です。この病気は犬科の動物だけが感染します。

原因

原因はアデノウイルスの感染です。感染は主にアデノウイルスにかかった犬との接触、あるいは直接病気の犬に接触しなくても、その病犬の唾液や尿、食器などを舐めることによる経口感染で成立します。

症状

通常ウイルスが感染しますと、約一週間の潜伏期間をおいて、様々な症状が発現してきます。発熱、食欲不振、嘔吐、下痢、呼吸器感染症、血便、黄疸などです。症状がでない場合が一番やっかいで、その犬の体液や便や尿にはウイルスが多量に含まれており、他の犬に移すという可能性があります。また、特に仔犬のなかにはこのウイルス感染により突然死するものもいます。

病気から回復してからも長い間ウイルスを排泄し続けます。この肝炎にかかって回復した犬の尿から、最長九ヶ月間もウイルスを検出し続けたという報告があります。

回復期にブルーアイといわれる青白色の特徴的な角膜混濁が認められることもあります。

診断法

動物病院では、一般的に、問診、視診、触診、血液検査などを行い仮診断して治療を始めます。確定診断を行うには、検査機関に依頼して抗体検査や特殊な方法によりウイルスを確認します。

治療法

今のところアデノウイルスを殺せる薬はありません。そのため獣医師の手によって様々な治療方法が試行錯誤されてきましたが、はっきりとした効果が判定された療法はありません。

一般的には細菌の二次感染を防止するために抗生物質の投与、解熱剤、抗炎症剤、神経症状が出ている場合は抗てんかん剤、症状にあわせて点滴や栄養剤、強肝剤の投与などの対症療法を行います。また、インターフェロ

ンが用いられることもあります。

自宅での看護法

治療は獣医師に任せるしかありません。自宅では、発病した犬は特に大量のアデノウイルスを排出しますので、他の犬への感染に十分注意してください。これは病気から回復してからも数カ月（5～9ヵ月程度）注意する必要があります。排泄物や食器、敷物などは焼却処分。あるいは、日光消毒を行うか、クレゾールなどの消毒剤でよく消毒します。

退院あるいは通院できるようになったら、消化がよく栄養価の高い食餌を与え、獣医師から指示された投薬をきちんと行いましょう。また、暖かく十分な湿度を保った環境を整えてあげ、汚物などはこまめに処理してあげて清潔な環境を保つことが重要です。

予防法

ワクチン接種で予防するしかありません。アデノウイルスが犬の体内に侵入しても、ワクチンにより免疫ができていれば発病することはありません。

メモ

仔犬が生まれたら、母犬から初乳が与えられ、アデノウイルスに抵抗する力をもらいます。しかしながらこの力はいつまでも続くものではなく数カ月でなくなってしまうので、必ず獣医師に相談して適切なワクチンプログラムと追加接種を行いましょう。また、母犬のワクチン接種の有無が仔犬に大きく影響します。妊娠前には必ず獣医師に相談して適切なワクチンプログラムを行いましょう。